

## 4088 ママチャリ日本縦断の旅：長崎を訪ねた今一つの理由

長崎の諏訪神社をどうしても訪ねたかった。というのは、ご恩を受けた神主U様。

短期間だが、長崎・鎮西大社諏訪神社の宮司をされていたことがある。

過日、伊勢の理事長室を、お訪ねしたことがある。「地球4周ひとり行脚」の本をご恵存。

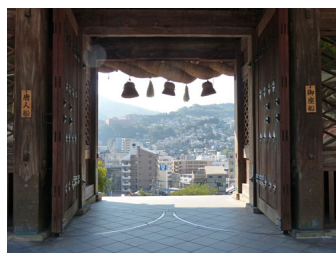
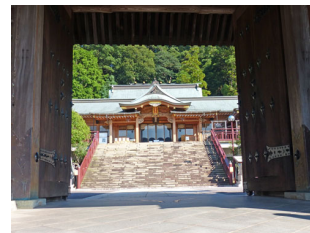
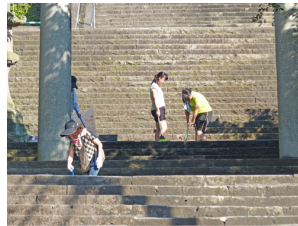
その後、神社新報社「神主学徒出陣残懐録」のご著書を頂いた。

日本の旅、日本中にお知り合いがある。一応47都道府県、訪ねている。その節、

邪魔にならない様に、了解を得て、お訪ねすることになっている。

顔をあわせることも、大切だが、過去、現在、どんな環境や状況を、体験されているのか、

先人や友人、知人を少しでも知りたいため訪ねている。早朝から皆さん、お掃除。



いい時間を持つことが出来た。今回、知覧や鹿屋での史料館は訪ねている。  
 心模様 4016、戦友。知覧、心模様 4038、戦争とは、特攻とは、ご著書を読んだことで、  
 下記のように、毎日、生と死と向かい合う状況の中で、  
 若者たちは何を思い、何を信じてその日々を生き抜き、出撃を迎えたのか。  
 463 ページに、下記、お孫さんが書かれている。  
 戦争と平和について考える、いい機会かと、掲載させていただいた。



附 圖

てから心配になり電話を入れた。「出来上がって提出した」との返事である。そして、その卒論の写しが送られて来た。涙が出た。その涙は、現代の青少年にも「特攻隊が理解される。いつの時代にも特攻精神は甦る。彼等の死は無駄ではなかった」との思いからであった。

私は、このたび学徒出陣の日記や関係の文章を一冊に纏め、本書として出版するに当たり、その中にこの論文を加えようと考えた。

十年一昔と云われる今日、六十年前の祖父の日記と、二十歳代の今の学生の特攻隊に対する考え方は、余りにも大きなギャップがあると思う。しかし、それを並べて見る時に、時間、空間を越えて流れる、人の心の鼓動に耳を傾けたくなる。その中に、私は静かに瞑想する。私はとても幸せである。

特攻隊の真実 — 孫娘の卒論を読んで —

私の長男の家には孫が四人、しかも女子ばかり。その四名共皇學館大学神道学科である。しかし、神社の後継ぎは誰がしてくれるか、未だ決まっていない。

その中の三女千枝が今年四月卒業する。昨年春、皇大の新田均教授に会った折、「千枝さん、卒論に『神風特別攻撃隊』を書くと言っていますので教えて下さい」と云われる。指導教授である新田教授は、私が戦時中、学徒動員で海軍航空隊に入ったことを知っておられ、そんな発言になったものであろう。

早速、孫娘に会った。「何で特攻隊を」の質問に、「大学のゼミの研究旅行に、知覧特攻平和記念館を見学し、数々の遺品を目にし、自分の考えのちっぽりだけであることが切実に理解された。毎日、生と死と向かい合う状況の中で、若者たちは何を思い、何を信じてその日々を生き抜き、出撃を迎えたのだろうか。彼等の考えに迫ってみたい」と云う。

考え方が真剣なのである。「それならおじいちゃんも海軍にいたから手伝うよ」と、皇學館学生時代や海軍時代の日記を渡した。「私が追憶談を語るより、当時の日記の方がより真実味がある」と言葉添えした。

それ以後、この件については何も話はなく、果して進んでいるのかどうかも知らなかった。今年に入っ

特攻隊の真実 — 孫娘の卒論を読んで —